太宰治は北海道へ渡ったか

――或る《詩と真実》――

大森郁之助

Ⅰ

「近代日本の文学者で太宰ほど旅行をしなかった人も珍しいのではなかろうか」（渡部芳紀氏「太宰治と風土」、別冊国文学『太宰治必携』昭55・9学燈社）とまで言われる太宰であるから、その数多くない旅行先・旅行体験は、数多くないゆえに彼の作品中の言及と諸々の伝記的資料を綜合すればほぼその輪廓は把えられている、といえそうである。

そうした中で恐らくただ一件、具体的な事は殆ど何も判らず、さりとて無視もしかねる、という中途半端な状態にあるのが、太宰の〈北海道行〉である。例えば前引「……風土」は冒頭の概説部分で

北海道には一歩足を踏み込んだ程度（略）

とし、次いで各論の「北海道」の項では

昭和十六年一月発表の「佐渡」の中で〈十年ほど前に、北海道へ渡つた事があつたけれど、上陸第一歩から興奮した。土の踏み心地が、まるつきり違ふのである。土の根がばかに大きい感じがした〉と書いている。その頃実際に北海道へ渡ったのかどうか詳かではない。

と解説する。勿論、その反対に〈渡ったのは確実だ〉とか〈足跡は道内各地に及んだと思われる〉とかは言えないのだが、さりとてこれだけでは、例えば、渡道の有無自体不詳なままでどうして上陸範囲を推測出来るのか、といった不審も残ろう。又詳かでないと云えば全面否定ではない訣だが、北海道は所謂ご当地文学の探索には熱心な所なのに最近刊で類書中最も浩翰な木原直彦氏『北海道文学史』大正・昭和戦前篇（昭51・4北海道新聞社）や『北海道文学散歩』道南篇（昭57・9立風書房）も、太宰に関しては作品として『新釈諸国噺』の「人魚の海」を挙げるのみ、作者本人の渡道については肯定否定いずれの言及もない。かくかく考えるのが定説、といえる段階には、未だ到っていないように思われる。

前引、『公論』十六年一月号掲載の「佐渡」で太宰が北海道に言及しているのは次の二個所である。共に新潟からの船が佐渡に着く前後のことだが、まず海上から望見した佐渡の島影に関連して

(イ)「さあ、もう見えて来ました。」といふ言葉が、私の耳にはひつた。／私は、うんざりした。あの大陸が佐渡なのだ。大きすぎる。北海道とそんなに違はんぢやないかと思つた。台湾とは、どうかしら等と真面目に考へた。

次いで着岸後の第一印象を

(ロ)格別、内地と変つた事は無い。十年ほど前に、北海道へ渡つた事があつたけれど、上陸第一歩から興奮した。土の踏み心地が、まるつきり違ふのである。土の根が、ばかに大きい感じがした。内地の、土と、その地下構造に於いて全然別種のものだと思つた。必ずや大陸の続きであらうと断定した。あとで北海道生れの友人に、その事を言つたら、その友人は私の直観に敬服し、そのとほりだ、北海道は津軽海峡に依つて、内地と地質的に分離されてゐるのであつて、むしろアジア大陸と地質的に同種なのである、といろいろの例証をして、くはしく説明してくれた。

とする。(イ)文の叙述では北海道を実際に海上から望見したことがあるのか、それとも想像上の比較か、次項の「台湾」の場合との異同がさほど明確でなく、どちらとも断じ難いが、(ロ)文でははっきり「渡つた事があつた」と言い切っている。「佐渡」は前年昭和十五年十一月新潟高校に招かれて講演をした折の事を述べた「みみづく通信」(『知性』昭16・1)の続篇ともいうべく、用務終了ののち足を伸ばした佐渡行を描いたものだが、前者同様、実録風・典型的身辺雑記小説風(実否は知らず)に仕立てられている。例えば「佐渡」末尾に(作者後記。旅館、料亭の名前は、すべて変名を用ゐた。)とわざわざ註記しているのなど、作中の旅館・料亭の実在——主人公「私」の行動の即実性を、裏返しの形で強調しているとも見られよう。

とすれば、その「私」の経験として述べられている「北海道へ渡つた」云々も太宰の身の上の事実として受取るのに躊躇するいわれは無さそうだが、反面、事実として読むとなると少々腑に落ちない点もある。太宰はかねがね、観察対象として自然の風景よりも人事・人生に興をおぼえ惹かれる性癖があることを述べ立てているが、「佐渡」に近い時期では「貪婪禍」(昭15・8・5京都帝国大学新聞)にも、「素直に、風景を指さし、驚嘆できる人は幸ひ」だが「悪業の深い一人の作家だけは、どこへ行つても、何を見ても」「その土地の人間の生活が、すぐに、わかつてしま」い、人々の「日々の糧が見えるだけ」だと言い、後年美知子夫人も十四年五月の信州旅行の折の感想として

着いたきり宿に籠って酒、酒である。(略)この人にとって自然は何なのだろう。花鳥風月はどんな意味をもつのだろう。おのれの心象風景の中にのみ生きているのではないか——こんなことを思う一方、盲目の人と連れ立って旅しているような寂しさを感じた。

(昭53・5人文書院刊『回想の太宰治』「御崎町」)

と述べている。(註1)この「佐渡」でも〈自然〉については前引海上からの望見と上陸第一歩の大地の感触以外(以後)は殆どふれず、ふれる場合も例えば末尾近くでの

海岸へ行つて見た。何の感慨も無い。山へ登つた。金山の一部が見えた。ひどく小規模な感じがした。さらに山路を歩き、時々立ちどまつて、日本海を望見した。ずんずん登つた。寒くなつて来た。いそいで下山した。

といった全く素気ない調子で、ふれるにはふれているというにとどまる。ところがその佐渡と対比される北海道の方は、海上からの望見と大地の感触とのみを取上げられ、北海道に於ても当然より強く眼と心を惹いた筈の「人間の生活」のさまは、対比に上って来ない。これは何故か。

①佐渡上陸後は大好きな「人間の生活」(佐渡の)が現前につきつけられてしまったので、過去の経験(北海道で見た「人間の生活」)などもはや思い浮かぶ余地が無かった。

という理屈も考えられなくはないが、上陸前及び上陸の瞬間の北海道対比の丁寧さ=北海道の役割の大きさ、記憶の強烈さ(?)と較べて、不自然の感は否めまい。とすれば、

②北海道は海上から望見し土を踏んだだけで、「人間の生活」は見

聞きせずに終ったのではないか？

とも考えられる。具体的行動としては例えば連絡船で函館の埠頭に下り立っただけで直ぐに引返して来た、といったふうに。更に疑えば、大地の感触の比較が、特に〈自然〉不感症を自称する太宰でなくとも微妙すぎ（また、逆に）遠大すぎはしないか。地中にボーリングした検査技師の感想ではあるまいし、地表を踏んだ感じで地質の異同に思い及び、友人が科学的見地から賛嘆してくれた等、本人も真面目に言っている訣ではない空想としてなら愉しく、作品の一つの味わいでもあろう。しかしそのファンタジックな部分での取上げ方が〈北海道〉の取上げ方として最も大がかりであり、本篇で〈北海道〉が果たしている役割はファンタジイの形成である、――ということは、〈北海道〉という観念自体の、作者にとってのファンタジイ性を示唆しないだろうか。ひょっとしたら太宰は

③函館埠頭への一歩さえも、印していないのではないか。「北海道へ渡つた」云々は全くの虚構なのではないか？

作者が「渡つた」と明言している事柄をその言い方などから疑うのは疑ぐり深すぎるようだが、作品中の言明を金科玉条とするなら、「佐渡」での右の言明とは逆に前年発表の「善蔵を思ふ」（昭15・4『文芸』）には

私は、もう十年も故郷を見ない。八年まへの冬、（略）青森の検事局から呼ばれて、一人こつそり上野から、青森行の急行列車に乗り込んだことがある。（略）青森へ着いて、すぐに検事局へ行き、さまざま調べられて、帰宅の許可を得たのは夜半であつた。（略）青森駅前の屋台店で、支那そば一ぱい食べたきりで、そのまま私は上野行の汽車に乗り、ふるさとの誰とも逢はず、まつすぐに東京へ帰つてしまつたのだ。十年間、ちらと、たつた一度だけ見たふるさとは、私にこんなに、つらかつた。

とある。「八年まへの冬」の検事局出頭というのは昭和七年十二月の事実として伝記研究上でも承認されており、「十年も故郷を見ない」というのは、丁度十年前の五年四月東大仏文科に入学し上京した太宰が同年十二月南津軽碇ヶ関温泉に滞在して小山初代さんと仮祝言を挙げた後は帰郷していないのと、符合する。但しこの文では「八年まへ」の夏、七年七月の青森警察署出頭という事実が省かれているが、これは行先・目的共「冬」の検事局出頭と類似しているから重複を避けたということも考えられて、さして重大な事実隠蔽ではなく、本文の即実性を覆すものではあるまい。しかしもし太宰がこの間に北海道へ、青森を経由して（東京その他から直接フェリーの便がある現代とは違う）渡っていたなら、最終目的地が青森でないからこれは別、というのは詭弁だろう。検事局出頭とべつに、これ又故郷の傍を通過しながら故郷には立寄れなかった、もう一種類の例外行為として但し書きされなければ、許される省筆の範囲を越えた隠蔽・虚構となりはしないか。

ただし際どいのは、「佐渡」で北海道へ渡ったという「十年ほど前」即ち昭和五年〈頃〉が、「善蔵を思ふ」で「十年も（故郷を）見ない」とする指定期間の末端と重なることである。かりに一年の幅を許容して昭和四年に渡道している場合は、形式的には「善蔵……」と牴触しない。また、内容的にも「善蔵……」での故郷敬遠は私が「沢山の汚名を持つ」ゆえだが、太宰自身の「汚名」としては㈠五年十月、太宰の後を追って小山初代さんが青森の置屋から出奔上京し、それまでの、通常の道楽息子の芸妓遊びといった事態と一変してしまったこと、次いで㈡十一月の田部シメ子さんとの鎌倉海岸心中未遂事件が、早い時期の主要項目に挙げられよう。従って五年より前、或いはもっとシビアに五年夏以前の渡道＝青森通過ならば、ことの本質からも「善蔵……」とは牴触しない訣である。

だが、そこで又考慮に入れなければならないのは、前述、〈自然〉嫌いと恐らく表裏の関係にある、太宰の旅行下手といわれる習性である。「宿屋の選定、交渉などは全く駄目な人であった。（略）太宰の場合、郷里では旅先にそれぞれ定宿があり、生家の顔で特別待遇を受けてきた。生家の人みな顔の利かないところへは足をふみ入れない主義のようである。（略）そのような人任せの習慣から、三鷹時代にもまだ脱けきれなかった」（美知子夫人『回想の太宰治』「三鷹」）という彼、ことの本質に於ては「旅行ぎらいではなかった」といえるにしろ具体的には「気が利いて何から何までやってくれるおともがいたらという条件つきで」の話である（同右）彼が、三鷹時代以上に人ずれ・世間馴れしていなかった昭和四、五年当時、十年後の「佐渡」でのように漫然と（「佐渡」でさえ上陸後の旅館や料亭の選択、そこでの応対の拙なさが強調されている）北海道へ渡る――渡る気になる、という事は、有り得ないとはいえまいが又すんなりと想定もし難い。まだ上京前で、函館迄はその日の中に着けたろう郷里金木町、或いは高校の所在地弘前からとしても、である。

ではその腰の重い太宰がたとえ函館までででも渡る気を起こすような、〈止むを得ない〉事情、これといった目的としては、何が有り得たろうか。結論を先にいえば、現在迄に確認されている限りの身辺事実からは、全く浮かんで来ないのではないか。

例えば、今問題にしている時期の直後に出奔上京という事態に到る初代さんは、長篠康一郎氏の調査によれば実父が「北海道室蘭で蒸発してしまい、（略）その後大正十一年前後に」「満十歳（略）の頃」母に連れられて「青森に引き上げて来た」という（昭57・3広論社刊『太宰治文学アルバム・女性篇』「小山初代」）。初代さんには父の思い出に繋がり、その縁では太宰にとっても抽象的にはかなり重味のある繋がりの地ともいえようが、具体的に何らかの行動をよびおこす種類の繋がりではなさそうだ。初代さん本人も実母も既に青森へ移って来てしまって久しい（父の行方不明は、相馬正一氏『評伝太宰治』第一部「義絶とその周辺」では「大正十四年三月」以前、と幅を持たせているが、大局は動くまい）。引き上げた後の故地室蘭（或いは広く北海道）との係り合いは詳らかではないが、昭和八年の初代さん実母宛の太宰書簡（長篠氏前掲書紹介。昭8・2・27付）には「北海道の方へ、おいでなりたい旨、承りましたが、そんなにまでなさらないでも」云々とあり、さらに後年、太宰と離別（昭12）した初代さんが一旦青森に帰ったのち二度にわたって（長篠氏前掲書）北海道へ働きに行ったとされることについても、「叔父のひとりが住む室蘭に」（近藤富枝氏、昭57・5中央公論社刊『相聞』「水上心中」）とも云い、なにがしかの縁辺はあったかと考えられる。

だが昭和四五年の太宰と初代さんの関係は、太宰に正式の結婚に進もうという意志の乏しかったらしい事が定説化しており、初代さんの方からいえば出奔という形で打開するしかなかったのだとすれば、親戚知人（北海道在住の）に挨拶に行ったり了承や助力を乞うようなものではなかったろう。四年秋以降の太宰の急激な左翼思想的変貌、十二月のカルモチン自殺未遂、五年一月の弘前高校新聞雑誌部委員（太宰もその一人だった）検挙といった身辺多事をとくに絡めるまでもあるまい。

昭和四五年という時期限定を外しても、その後の太宰は東京の住人となって、北海道は物理的にも漫然とは行きつき難い遠隔地になってしまう。そうした太宰を敢て導き寄せるような要因はやはり見出せない。山岸外史によれば（昭37・10筑摩書房刊『人間太宰治』「初代さんのこと」）離別後初代さんから太宰に「何回か」手紙が来て太宰の方も「二三年たっている（離別から？）三鷹時代」に「ときおりは」「指導的な返事を書いてやったこともあ」り、より後年、恐らく十九年七

月初代さんが中華民国山東省青島市で病歿（昭53・6筑摩書房刊『太宰治研究』Ⅱ付載年譜、山内祥史氏）することになる時期には「太宰は、病気中の初代さんに何回か見舞金を送ってやっている。三回ほどは、ぼくも知っている」と（但し山岸は初代さんが青森で亡くなったように書いているが）いう。しかしそれはそれとして、文通（或いは送金）を越えて直接北海道まで訪ねた事もあったのではないか、とは、賢夫人の内助に支えられていたこの時期、想像もし得まい。それにそもそもが「佐渡」での「渡つた事があつた」という文言に拠る探索なのだから、その前の「十年ほど前」という時期指定の方は無視する、というのでは、一体なにをやっているのか判らなくなってしまう。

事、「佐渡」の一節が提起する問題としての限りでの太宰の〈北海道渡航体験〉の実否は、二者択一的に事実か虚構かと問うならば虚構と断ずるのが、現存資料からの帰結であろう。

Ⅱ

ところで渡道（の実否）と関連なくはないものの明確に別の事柄としてだが、太宰の作品には時として北海道が、具体的イメエジとしてよりはむしろ或る種の観念として、現われる。そのことを考えてみたい。

北海道を作品の舞台として表面に立てたものは皆無と云ってよく（『新釈諸国噺』の中の「人魚の海」は原作の西鶴『武道伝来記』巻二ノ四「命とらるる人魚の海」が松前の海としているので、太宰の働きではない）、これも強いていえば太宰渡道否定の心証になろうかと思われるが、それより形はさりげなくはあるが太宰自身の身にまつわる要素として現われるのが、「佐渡」と同年月、十六年一月号『文学界』発表の「東京八景」である。左翼非合法活動にかなり深く巻き込まれていたかと思われる昭和七年の事として、

そのとしの晩春に、私は、またまた移転しなければならなくなつた。またもや警察に呼ばれさうになつて、私は、逃げたのである。（略）家財道具を、あちこちの友人に少しづつ分けて預かつてもらひ、身のまはりの物だけを持つて、日本橋・八丁堀の材木屋の二階、八畳間に移つた。私は北海道生まれ、落合一雄といふ男になつた。

「北海道生まれ」と称したのは変名と同様素性を隠す為で、とくに北海道と限らず岩手生まれでも秋田生まれでも（太宰の隠し難い津軽訛りが余り妙でない範囲なら）どこでもよく、さして意味はなかったとも思えるが、逆にいえばどこでもよいのに北海道を選んだのは何らかの隠れた心理的要因があったからだろう。例えば、未練がましいが昭和四五年頃に北海道へ渡ってでもいれば、簡単に納得がいく。しかしこれは、他の所で渡道が確認されていればこちらに都合がよい、という受身の関係であって、その都合から積極的に渡道経験を想定するのは強引すぎよう。渡道の事実が無ければ思いつく筈のない詐称、とまでは云えないからである。

一つの示唆になろうかと思われるのは、「北海道生まれ……」の直前の隠れ家の所在地、「日本橋・八丁堀」である。現場検証的な事実究明を精力的に展開している長篠康一郎氏がこの地名称呼についても永年にわたり追究していて、『人間太宰治の研究』Ⅲ（昭45・5虎見書房）「非合法運動自首の真否」で「八丁堀」は京橋区であり「昭和六年～昭和十五年の間に、『日本橋・八丁堀』が存在した事実は全く無い」と明確に断定し、更に最近の『太宰治文学アルバム・女性篇』（昭57・3広論社）「『東京八景』と八丁堀」では「昭和七年当時に修治と初代が住んでいた下宿先は、正確には町名も八丁堀ではないこと（略）が確認できた」とされる。

これに対して、直接の反論というのではないが初代さんの叔父吉沢

祐氏は「太宰は（略）管理人から渋い顔をされて八丁堀へ引越し」と記し（「太宰治と初代」、昭32・12筑摩書房刊『太宰治研究』）、初代さんの弟小山誠一氏は相馬正一氏『評伝太宰治』第一部（昭57・5筑摩書房）「非合法活動」に収められた談話中で「日本橋八丁堀に引越す直前」とか「八丁堀にはひと月足らず居て」と語って、太宰の用いた称呼を肯定する形をとっている。共にいわば現場に立会った人の証言という重味は他に換え難いが、ただ、吉沢文が「昭和三十一年二月」の執筆（？）日付を付し、小山談話が（昭和三十九年四月二十八日談）と記されている所に、若干の斟酌が必要かと思う。当事者の記憶が同じ対象を扱った文学作品等の表現に逆に影響され改変され得ることはしばしば指摘されるが、実生活の中味ではない、従って生活者の最大関心事とはなり難い居住地名の類は、それが起り易いものの一つではないか。不動産を登記していたり、町内の世話役だったり、何代も住みついていたりといった場合と対蹠的な、いわば仮住まいの身と謂えよう当時の両氏は寓居の町名を法的正確さで認識していなくとも日常格別の支障はなく、後年太宰の小説でこう呼ばれていると知れば当時の記憶はさしたる抵抗もなく修正された――ということも考えられるのではないか。それに対して長篠氏の「日本橋」否定説は大日本地名辞書から最近刊の角川版日本地名大辞典の記述とも合致し、恐らく正統的な認識と思われる。

但し、太宰本人にとっては「日本橋……」が必ずしも作者としての着想ではなく、逆に単なる錯誤でもなかったかと考えられるふしがある。前項については、現在知られている（各全集等収録）太宰書簡の一通に七年「七月（日付不詳）東京市日本橋区八丁堀より」とする小館善四郎氏宛のものがあって、これが全集等編注者の推定による註記でないなら日常生活でも「日本橋」「八丁堀」と自称していた可能性がある。それではそう自称するに至った理由は、となるが、一般に日常生活で用いられる地名は必ずしも行政区画上の名称とは合致せず、例えば槌田満文氏『東京文学地名辞典』（昭53・2東京堂出版）に

八丁堀　（略）京橋区八丁堀仲町（略）日本橋区北島町一・二丁目、亀島町一・二丁目〔中央区八丁堀一丁目、日本橋茅場町二・三丁目〕の地域は、「八丁堀の旦那衆」と呼ばれた江戸町奉行付与力同心の組屋敷があったところで「八丁堀」といえばこの周辺一帯の総称。

とするような、正式名称の「（京橋区）八丁堀」以外の（日本橋区にまたがる）地域をも通称では八丁堀とよんだ、といった事情があれば、太宰が通称の「八丁堀」と正式区名の「日本橋」とを組み合わせた所書きを記したとも考えられなくはない。しかし一方、右辞典の記述で現行地名として〔　〕書きされた茅場町三丁目にお住まいの旧知天野貞子夫人に伺ったところ、町内に親の代から住んでいる六十前後の方数人にたずねてみたが八丁堀とよんだ記憶はない由、との御返事を頂いた（五十八年夏）。恐らくオーソドックスな文献資料を踏まえてであろう右辞典の記述に、日常の交際の中でのいわば非体系的・非組織的な聴き取りを以って争う気はないものの、こと〈通称〉であれば地元の日常生活での認識を頭から却けることは出来まい。無論逆に、こう呼んではならないと規制されるものでもないから、自身が移住者・風流人等地元のスタンダードから外れた者でスタンダードならぬ呼び方を好み或いは覚え込んでいる人物が太宰の耳に入れた、という偶然（例えば）も、有り得なくはなかろう。

書簡の所書きなどはそう考えて済むとしても、作品「東京八景」での叙述は、どんなものか。「これは東京市大地図と首っぴきで書いた作品であるらしい（引用者註、『東京八景』の本文中にそう書いてある）から、京橋と日本橋とを間違える筈もなかろう」と長篠氏が言う（『人間太宰治の研究』Ⅲ「非合法運動自首の真否」）のは、裏返して

いえば、単なる迂闊ととりなし・見逃してやるのはかえって作者の真意に反する恐れがある、という注意でもあろうか。かりに日常生活では迂闊から誤用し、それが元になっているとしても、「東京八景」では誤用と知りつつ容認＝採択したのなら、改めてその仮構のもつ意味が考えさせられる。

思い合わされるのは、第一創作集『晩年』で巻頭に収められた「葉」（初出『鵝』第一輯、昭9・4）での、日本橋の橋の上で花を売る「異人の女の子」の心理解説である。

なぜ、日本橋をえらぶのか。こんな、人通りのすくないほの暗い橋のうへで、花を売らうなどといふのは、よくないことなのに、――なぜ？／／その不審には、簡単ではあるが頗るロマンチックな解答を与へ得るのである。それは、彼女の親たちの日本橋に対する幻影に由来してゐる。ニホンでいちばんにぎやかな良い橋はニホンバシにちがひない、といふ彼等のおだやかな判断にほかならぬ。

この異国の少女の親達と全く別種ともいえない「日本橋に対する幻影」は太宰自身にも、少なくとも上京当初までは残っていなかったか。本土の北辺で東京風というよりむしろ江戸趣味・粋や通に憧れ真似さえしていたという彼が

はじめて東京に住んだ時（略）夜、部屋を閉め切り、こつそり、その（東京市の）地図を開いた。赤、緑、黄の美しい絵模様。私は、呼吸を止めてそれに見入つた。隅田川。浅草。牛込。赤坂。ああなんでも在る。行かうと思へば、いつでも、すぐに行けるのだ。私は、奇蹟を見るやうな気さへした。（東京八景）

と云うのは、誇張はあっても事実無根の作り話とも思えない。〈日本橋〉についていえば、芥川と並んで泉鏡花は太宰にとって「素通りしたとは言いかねるふしが多々見出され」、とくに初代さんと我が身との間に引き較べ得る「湯島詣」に「関心を抱いたであろうことは容易に想像される」（村松定孝氏「太宰治と泉鏡花」、『解釈と鑑賞』昭52・12）。その「湯島詣」からも、同じ作者の名作「日本橋」は一足の距離である。

前引長篠氏は『『東京八景』は、鎌倉入水事件を見ても判るように、その大部分が創作（フィクション）である。ことに『日本橋・八丁堀』の前後において顕著に認められると思うが、それでは『日本橋・八丁堀』の項のみ真実を描いたであろうか」と問題提起した（前掲書）。氏が問題とするのは「八丁堀」時代の最大事件と目される「自首」の実態と思われるが、同じ観点から、「日本橋・八丁堀」という舞台自体、有意味の創作――憧れの東京で非合法運動への自己投企からやがて脱落へと、《下降志向》ドラマの一つのクライマックスが演じられるに適わしい、あるべかりし土地だった可能性が、浮かんで来よう。

ところで、「日本橋……」に移転し「北海道生まれ……」と称したという一連の別人格造出作業の中で前半部の性格がそのように把握されるなら、後半にも同様の趣向が、これは可能性以上の蓋然性として、推測されるのではないか。さきに北海道渡道経験があれば北海道生まれの詐称も生じ易かったろうと云った。今は逆に、かつて渡道したことが無く、現実の繋がりはない土地だからこそこの文脈の中で出身地として想到され易かったか、と考え得る。

勿論、現実の繋がりの無さは必要条件の一つではあっても全てではなく、その反面では、太宰の想念中には相応の位置を占めている土地でなければなるまい。

金木・青森（中学時代）・弘前（高校時代）の各地域特性を越えて、ともかく本州の中で最も北海道に近接し往来交渉の多い東北々部という地域社会[註2]が環境として太宰に与えたろう、北海道への一般的親近感は、まず想像し得る。その上の個人的条件としては前述初代さんと北

海道との関りも無視できないが、よりブッキッシュな位相に於ては、前引「善蔵を思ふ」で内容とは直接繋がらないのに題名に採られた同郷の作家葛西善蔵（恐らく、主題たる故郷への屈折した思いの共有に於てだろう）が、少年時の北海道内放浪に基づくと思われる幻想的な佳品「雪をんな」を残している。また「魚服記」（昭8・3）や「津軽」（昭19・11）で、本州北端の「ぼんじゆ山脈」や三厩海岸に残る「義経が家来たちを連れて北へ北へと亡命して行つて、はるか蝦夷の地へ渡らうとここを」通った（魚服記）伝説に関心を示していることについては、長篠氏が太宰の〈長兄との違和による、兄頼朝に疎外された義経への共感〉というモチイフを繰返し力説している。もっとも太宰は、三厩では「よそから流れて来た不良青年の二人組」が義経と弁慶を装って「田舎娘をたぶらかして歩いたのに違ひない」が「まさか、いま、義経だと言つて名乗つたつて、信じないだらうしね」と「馬鹿な事を空想して」もいるし（津軽）、「魚服記」での義経伝説も「少しお伽噺めいて」「考えようによっては多少ふざけた発想」（相馬氏、昭58・7筑摩書房刊『評伝太宰治』第二部「『海豹』のころ」）である等、深刻な共感だったかどうかは慎重を期したいが、必ずしも必要な範囲とは思えない筆の割き方からみても、広い意味の感興が存したことは疑い難い。そしてその義経像は、前述のように蝦夷渡りの途上のものであった。このことも又、多少は太宰の対・北海道意識に作用したかも知れない。

註1　太宰の〈自然〉観については旧稿「太宰治と自然」（『解釈と鑑賞』昭52・12。のち桜楓社刊『太宰治への視点』に収録）に詳説した。

2　最も身近な形としては、例えば美知子夫人「アヤの懐旧談」（『信州白樺』51・52合併号、昭57・10）に太宰の生家津島家の小作状況に関連して、「津軽では……三、四反の小作など食っていけないから北海道、樺太方面に鯡とり、杣夫として相当傭われて行った」旨の、元奉公人中西信吉さんの談がある。

付記　本稿の骨子は昭和五十八年十一月、国学院大学国語国文学会秋季大会で口頭発表した。当日助言や示唆を与えられた学会副会長（当時）石田博教授他の方々にあらためて感謝申し上げる。

（昭60・9・7稿）